〔ふるさとの宝№３０〕

中島藤左衛門さんという人

（なかじまとうざえもん）

千五百年代末のころ、阿井の奥湯谷には中島藤左衛門という近郊きっての豪農が住んでいた。藤左衛門さんの家は奥湯谷の西側、石原昭さん宅付近にあった。現在石原さん家の屋号は「中島」（なかじま）となっている。

藤左衛門さんは豪農というだけあって、その当時奥湯谷、見寄、中田、小阿井、それに八幡、川子原にわたる地域の田地の多くを所有していたという。このように広い土地を有していた藤左衛門さんだっただけに、土地の開墾もしていた。また、昔ながらの野道も作った。自分が持っている田地を一通り回ってみると、一日中を費やしても十分ではなく、見回っているうちに日が暮れるというほど広大であった。

ある年の田植えには植える予定の田が時間不足で植えられなかったので、西に沈む夕日を扇で落ちるのを止め、その日のうちに田植えを無事終わらせたという話が残っているぐらいである。丁度平清盛が音戸の瀬戸の掘削工事の折、沈む太陽を呼び戻したという故事と同じことが伝えられている。

また、中島邸の正面向こうの山に松の大木があって、それにまきついたカズラを、つないでいた赤毛の牛が樹上高くそれをよじ登っていったという話も伝わっており、それほどに中島家が隆盛期であったことを物語っている。

このように隆々と栄え豪農とうたわれた藤左衛門さんだったから、これまで観音寺として小さな庵寺にすぎなかった堂宇を、寺司の光山正玉和尚と相談して、慶長元年（一五九六）に長栄寺と改名し、開山は正玉和尚、開基は中島藤左衛門となったのである。

藤左衛門さんはこのように長栄寺の開山のために尽くしたので、没後の法名は長金信士といい、その妻は妙栄信女という、夫婦に長栄の文字をつけられて今でも長栄寺の墓地に眠っている。